

富山県南砺市城端におけるアニメファンと地域住民の交流に関する現地調査

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程2年 花房真理子

1) 概要

「アニメ聖地巡礼」と呼ばれるアニメファンの活動は、旅人主導の「次世代ツーリズム」として観光学の分野で一定の議論がなされ、近年ではまちおこしという観点から社会的にも高く注目されている。「アニメ聖地巡礼」を発端として、アニメファンは地域住民と経済的・社会的な交流を行う。しかし、このような交流はアニメ作品の人气が低下するとともに衰退するのではないかという疑問の声もあり、交流の持続可能性については議論の余地が多分に残されている。そこで本調査では、2008年の放送開始から現在まで、アニメファンと地域住民の継続的な交流が確認できる、テレビアニメ『true tears』の舞台のモデルとなった富山県南砺市旧城端町を事例として取り上げ、現地調査を行った。現地調査では、なぜアニメファンと地域住民の交流が継続されているのかを明らかにするため、(1)伝統祭事の視察、(2)文献調査、(3)アニメファンに対するインタビュー調査を行った。

2) 訪問先と現地調査期間

富山県南砺市（旧城端町）

第1回：2013年（平成25年）5月4～6日 ※「城端曳山祭」開催期間

第2回：2013年（平成25年）7月26～27日

3) 現地調査の報告

① 伝統祭事の視察

富山県南砺市の旧城端町(以下、城端と略記する。)では、毎年5月に「城端曳山祭」が開催される。「城端曳山祭」は、城端の惣社である城端神明宮の春季例祭であり、起源は1685年（貞享2年）とされる。この祭礼では、神輿の渡御行列に続き、「庵唄」を披露する庵屋台、御神像を乗せた6基の「曳山」と呼ばれる山車が城端の街中を巡行する。

アニメファンの一部が結成した「真実の涙をもう一度」有志会が、2011年（平成23年）5月5日木曜日、「城端曳山祭」にて「庵唄所望」を受けた。続く2012年（平成24年）、2013年（平成25年）にも、同有志会は「庵唄所望」を受けている。2013年（平成25年）には、同有志会が「城端曳山祭」の「曳山」の曳き手を募集し、アニメファン5名からの応募があった。

このように、アニメファンと地域住民が、観光客と観光地の関係を超えて地域の伝統祭事とともに盛り上げていく様子を確認するため、2013年（平成25年）5月4～6日の3日間、「城端曳山祭」を中心に現地視察を行った。同祭礼の視察とともに、「曳山」の曳き手として同祭礼に参加したアニメフ



ファン2名にインタビューを行った（インタビューについては、下記「(3)インタビュー」参照）。

② 文献調査

城端という地域の歴史や文化について見識を深めるために、城端図書館に所蔵される文献などを利用した。そのほか、アニメファンと地域住民の関係について多くを報じる富山県の地方紙「北日本新聞」なども活用した。

③ インタビュー

● 「真実の涙をもう一度」有志会のメンバー

2010年（平成22年）10月9日月曜日、アニメ作品を通じて知り合った4名のアニメファンは、「真実の涙をもう一度」有志会を結成した。同有志会は、城端曳山祭と城端むぎや祭に観光客向けの休憩所を運営する、城端曳山祭と城端むぎや祭でアニメファンに向けたイベントを開催する、地域情報誌「南砺のあるきかた」を製作・販売する、といった活動を行っている。同有志会の創設時から上述した活動を行うアニメファン2名に対してインタビューを行い、同有志会創設の経緯や活動への参加動機について話をうかがうことができた。



● 城端曳山祭にて曳山の曳き手になったアニメファン

2013年（平成25年）5月4・5日に開催された「城端曳山祭」では、5名のアニメファンが「曳山」の曳き手として活躍していた。5名のうち、富山県外から参加した2名にインタビューを行い、参加動機などについて話をうかがうことができた。インタビューを通じて得られたことは、初めて城端を訪問したきっかけはアニメ作品であったが、同祭礼への参加動機は必ずしもアニメ作品に関わりがあるわけではないということであった。インフォーマントは、アニメ作品をきっかけにして城端へ何度も足を運ぶことによって、城端の文化のひとつである「城端曳山祭」そのものに興味を持ち始めたという。アニメファンにとっては、観光客と観光地という関係を超えて、つまり「第三者」ではなく「一人称」としての体験をすることが、同祭礼に参加する動機となっていた。加えて、参加動機には、(1)他地域で開催されるものも含めた総称としての「祭り」を体験すること、(2)「城端の文化」としての祭りを体験すること、という異なる性質の動機があることが明らかになった。



4) 今後の課題

現地調査によって得られた知見に基づき修士論文を執筆した。今後は、現地に長期滞在するなかで、アニメファンと地域住民の交流について参与観察を行っていきたい。